

「特別の教科 道徳」の評価に関する研究

道徳研究会議

研究員 山崎 有紀（川崎市立浅田小学校） 中村 正宏（川崎市立百合丘小学校）

坂本 哲郎（川崎市立西中原中学校） 中本 幸枝（川崎市立橋中学校）

指導主事 水之江 忠

I 主題設定の理由

一部改正された学習指導要領（平成27年3月）には、道徳科の評価について、「数値による評価ではなく、記述式であること」「他の児童生徒との比較による相対評価ではなく、個人内評価として行うこと」「個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと」などが示されているが、その具体が見えてこなかった。『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について」が平成28年7月に出された。この報告書では、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」といった点に注目することが求められると示され、評価の際に重視する視点が見えてきた。

道徳科の評価は、児童生徒がいかに成長したかを受け止めて認め、励ます個人内評価となるようにすることが大切である。そこで、評価に際して、授業でどのような点を見取ればよいのか、見取ったことをどのように表せばよいかなどについて研究を行う必要があると考え本研究主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方向性

（1）道徳科の評価を探る

一部改正された学習指導要領や道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議の報告書を踏まえながら、道徳科の評価の基本的な考え方や具体的な見取り、示し方など道徳科の評価とはどのようなものかを明らかにする。あわせて、研究の途中で文部科学省が公表した「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成29年）」も踏まえていく。

（2）道徳科の評価の考え方に基づき実践する

研究を行い導き出した道徳科の評価の方法を基にして、実践し具体的にどのような見取りをすることができるのか、そのことを基にどのように示せるかなど、理論を具体的な取組とすることができるように研究を進める。

（3）道徳科の評価についてまとめる

研究してきた内容が、今後の道徳の特別の教科化につながるようにするため、冊子にまとめ配付し広く活用できるようにする。

2 研究の具体的な取組

（1）道徳科の評価を探る

本研究会議では、一部改正された学習指導要領や道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議の報告書をよりどころにしながらも、道徳の評価に関わる情報を集め検討し、次のように捉えられるのではないかと考えた。ここでは概略を示し、詳細は冊子を作成し、そこで示すこととする。

①評価についての考え方

評価は、児童生徒にとっては、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものである。

②授業者による授業に対する評価

ア 授業に対する評価の必要性と基本的な考え方

授業者が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かしていくことが大切であり、授業の評価を改善につなげる過程を一層重視する必要がある。

イ 授業に対する評価の工夫

授業者自らが記憶や授業中のメモなどによって学習指導過程や指導方法を振り返るような「授業者自らによる評価」やティーム・ティーチングの協力者などから評価を得るなど「他の教師による評価」が考えられる。

③道徳科における児童生徒への評価

ア 評価の基本的態度と基本的な考え方

- 学習状況を分析的に捉える観点別評価を通じて見取ろうとすることは、児童生徒の人格そのものに働きかけ、道徳性を養うことを目標とする道徳科の評価としては妥当ではない。
- 個々の内容項目ごとではなく、大きくりなまとまりを踏まえた評価とする。
- 児童生徒の成長を積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行う。

イ 学習状況と道徳性に係る成長の様子を見取り、記述により表現することの基本的な考え方

○評価に当たっては、特に、学習活動において児童生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視することが重要である。

○発言が多くない児童生徒や記述することが苦手な児童生徒が、他者の発言に聞き入ったり、考えを深めようとしたりしている姿に着目するなど重要である。

○一単位時間の授業だけでなく、児童生徒が一定の期間を経て多面的・多角的な見方へと発展していたり道徳的価値の理解を自分との関わりで深めたりしていることを見取っていく。

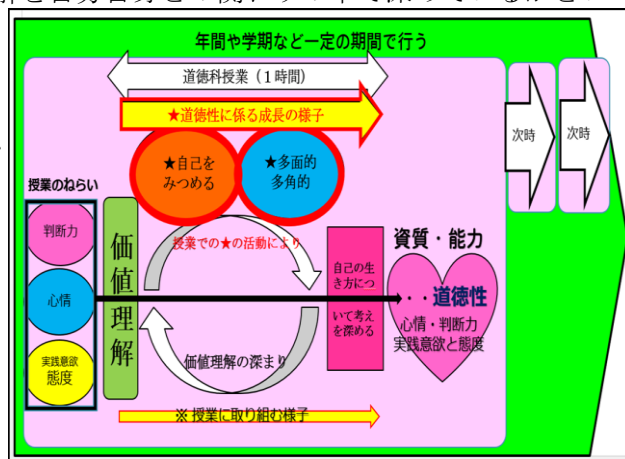


図1 道徳科の評価の考え方

ウ 道徳科の評価の視点

次の視点は、「学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（平成29年）」を基にした。この設定した評価の視点を、「道徳科の評価の視点」として記すこととした。

視点1 「多面的・多角的な見方・考え方」

一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうかを見取る

- ①道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしていることに着目する。
- ②自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしていることに着目する。
- ③複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしていることに着目する。

視点2「自己を見つめる」

道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうかを見取る

④教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしていることに着目する。

⑤現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目する。

⑥道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めていることに着目する。

⑦道徳的価値の実現の難しさを自分のこととして捉え、考えようとしていることに着目する。

※上記の2つの視点で評価を見取ることが難しい児童生徒については、自分で考えようとしたり、友達の意見を聞こうとしたりするなど、「授業に取り組む様子」を見取っていくことも考えられる。

エ 本時の評価の視点

授業ごとに設定する評価の視点を、ここでは「本時の評価の視点」として記すこととした。

設定に際しては、問題解決的な学習を設定した場合、展開の特性として道徳的な問題を多面的・多角的に考える活動などが学習状況として想定される。その場合、例えば、道徳科の評価の視点1-③「複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしていることに着目する。」ということが評価の視点として考えられる。この視点を基にして、授業のねらいや学習活動に合わせてさらに詳しく考え、「規則か個人の責任か、意見が対立する場面において、自己の取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。」というように「本時の評価の視点」を設定することが考えられる。

オ 一定の期間を経た評価

道徳科の評価を行う際には、児童生徒の具体的な取組状況を、年間や学期といった一定のまとまりの中で見取ることが大切である。一定の期間を経た評価を行う際には、1単位時間の授業の評価から右の図2のように「突出したよさを認める評価」や「進歩の状況を認める評価」を行うことが考えられる。

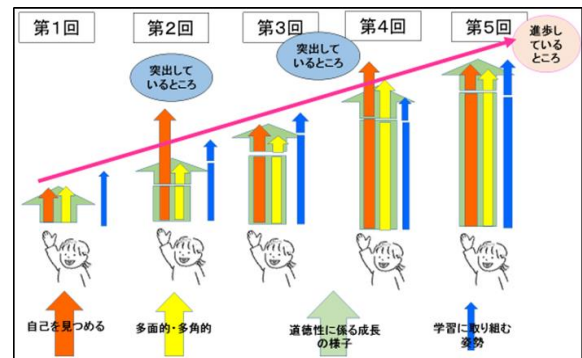


図2 一定の期間の中での「突出しているところ」と「進歩しているところ」の見取りの考え方

(2) 道徳科の評価の考え方に基づき実践する

①一単位時間の授業の評価の実践

先の「(1) ②道徳科における児童生徒への評価について」に示したことを基に考え、実践に取り組むこととした。一定の期間で見取るためには、日々の授業の積み重ねが重要になってくる。このことを踏まえ、初めに1単位時間の授業の見取りについて考えてみることにした。

次に示す図3「1単位時間の授業展開と評価の見取り」は、展開部分の概略とそれぞれの発問とそこでの生徒の発言からの見取りを示したものである。「本時の評価の視点」は、道徳科の評価の視点1-①とし、具体的に「登場人物のとった行動に対する判断や根拠を様々な視点から捉え考えようとしている。」と設定した。それぞれの発問での生徒の発言から、この視点と関わる発言を見取っていった。下線部がそれに当たる。また、この視点とは関わらなくても、道徳科の評価の視点と関わる発言があった場合も見取ることとした。それが、波線部の発言である。さらに、授業前に教材を読んだ後の感想と授業後の感想を書いた学習カードに変容が見られた生徒の見取りを示したものが、図4「学習カードに見られる生徒の変容」である。

中学校 第1学年

<主題名> 学級や学校の一員としての自覚

<教材名>「新聞作り」 <内容項目 C(15)集団生活の充実>【問題解決的な学習】

<ねらい> 班活動での直也と浩二の行動のとった行動について話し合い、責任や役割を果たす道徳的判断力を育てる。

<本時の評価の視点>

【視点1-①】 直也と浩二のとった行動に対する判断や根拠を様々な視点から捉え考えようとしている。

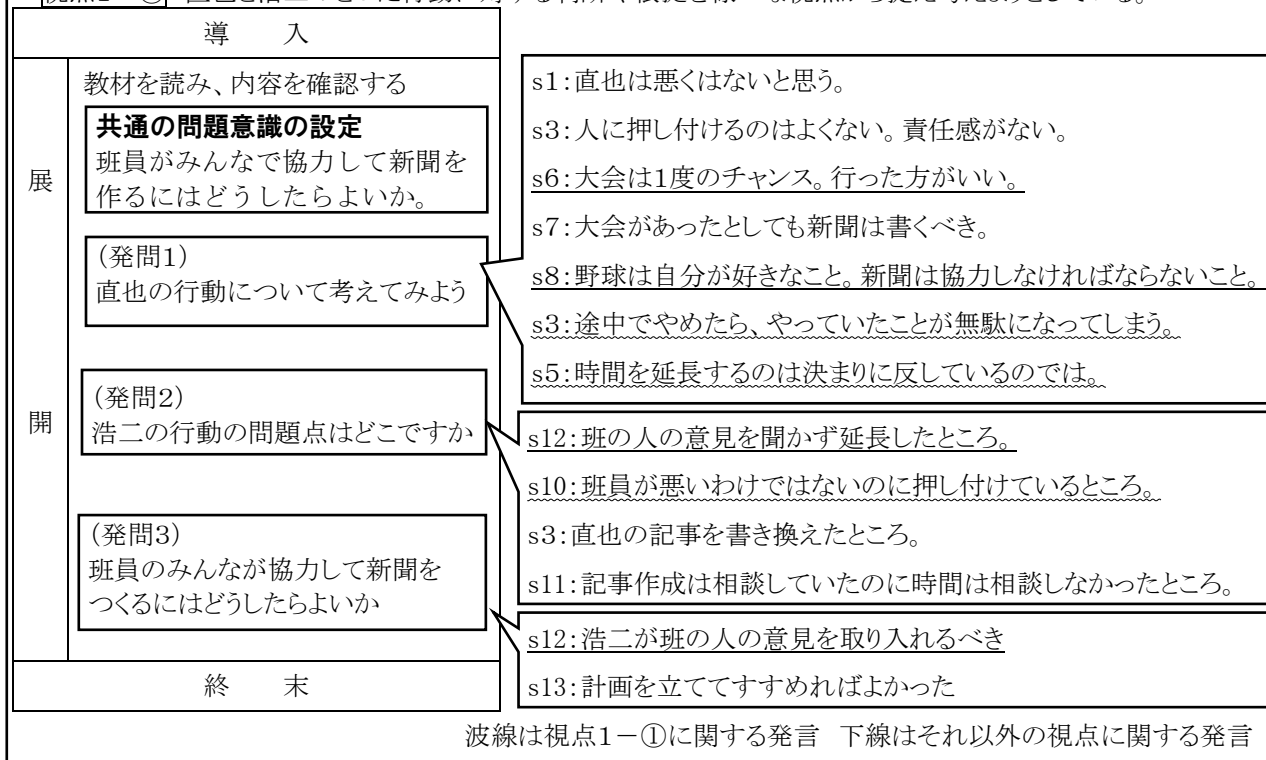


図3 1 単位時間の授業展開と評価の見取

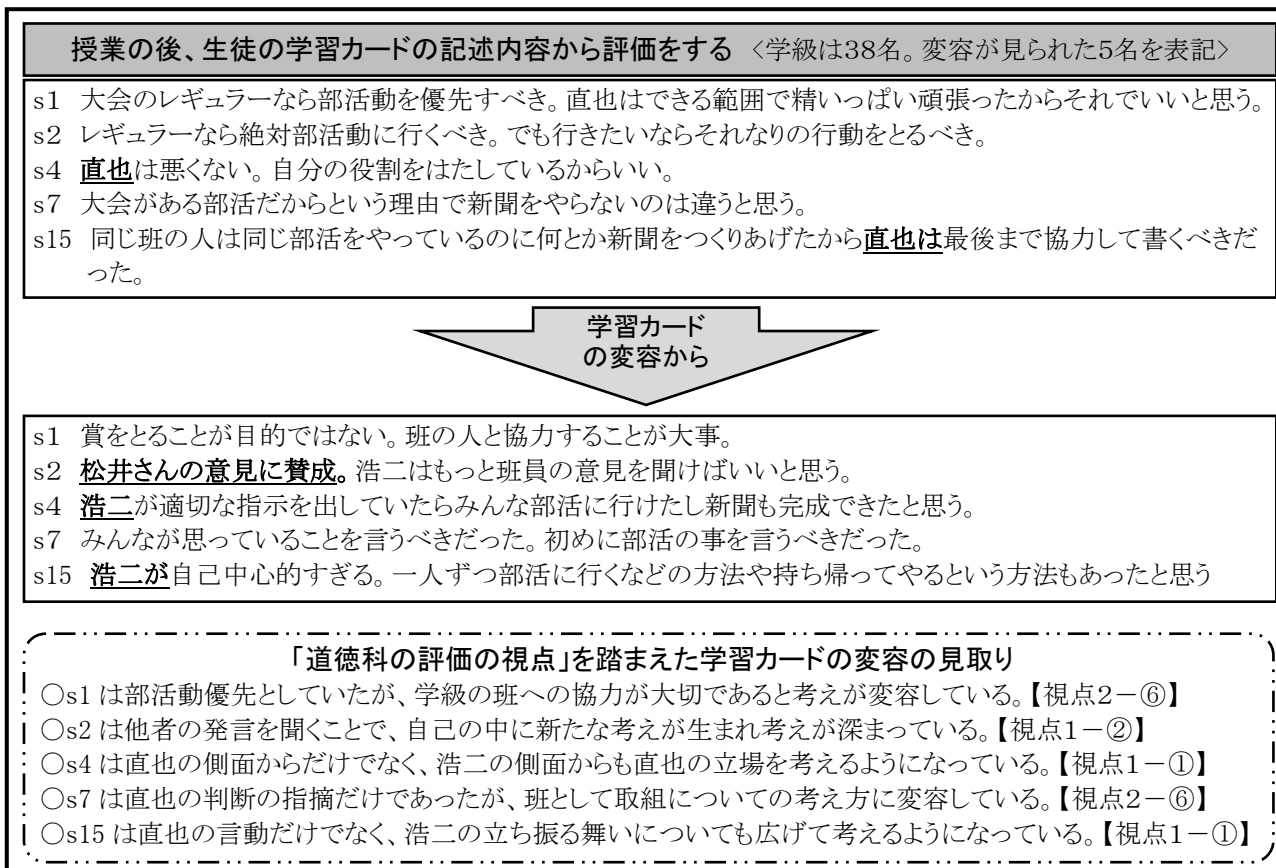


図4 学習カードに見られる生徒の変容

②一定の期間を経た評価の実践（小学校第5学年）

表 1 1 単位時間ごとの授業内容と本時の評価の視点

回	主題名（内容項目）・教材名・ねらい【指導方法】	本時の評価の視点
1	主題名：役割を果たす(C 役割の自覚と責任) 教材名：移動教室の夜 ねらい：集団での役割を自覚し、主体的に責任を果たそうとする態度を育てる。 【自我関与が中心の学習】	自分の役割を果たしてきたかどうかを振り返ったり、これから役割を果たすために大切なことを考えたりしている。 【視点2-⑤】
6	主題名：誠実な心(A 正直、誠実) 教材名：千羽づる ねらい：誠実に明るい心で生活しようとする心情を育てる。 【自我関与が中心の学習・体験的な学習】	うそをついた主人公と自己の取り得る行動を他者と議論する中で、誠実への理解を深めている。 【視点2-⑥】
7	主題名：規則の尊重(C 規則の尊重) 教材名：星野君の二塁打 ねらい：きまりを進んで守ろうとする態度を育てる。 【問題解決的な学習】	きまりと自己実現との価値の対立が生じる場面において、自己の取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている。 【視点1-③】
13	主題名：責任ある行動(A 自由、自律・責任) 教材名：みんなの「いこいの広場」 ねらい：自律的で責任のある行動をしようとする態度を育てる。 【自我関与が中心の学習・体験的な学習】	公園での過ごし方について主人公らが話し合う場面で、自分と違う立場や感じ方、考え方を理解しようとしている。 【視点1-②】

A児 突出したよさを認める評価（視点1「多面的・多角的な見方・考え方」）

道:1	B: 相互理解: ブランコ乗りとピエロ: 発言: ピエロのブランコ乗りに対する心情を、様々な視点から捉え考えようとしている。
道:2	A: 節度節制: 流行あぐれ: 発言: 役割交代で演じた立場の違いを感じたり、自分と違う演じ手の考え方を理解しようとしたりしている
道:3	C: 規則の尊重: 星野君の二塁打: 発言: きまりと自己実現との価値の対立が生じる場面において、自己の取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている
道:4	C: 公正公平: 泣き虫: 発言: WS: いじめは同調すること止めるためにはみんなの力
道:4	C: よりよい学校生活: WS: 自己の取り得る行動を他者と議論する中で、小のよさを見つけようとしている
道:4	D: 生命の尊さ: おばあちゃんからもらった命: WS: 前向きに生きる
道:5	C: 規則の尊重: 星野君の二塁打: WS: 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直そうとしている
道:5	A: 正直・誠実: 千羽づる: WS: 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直そうとしている

<一定の期間における顕著な様子>

積極的に話合いに参加したり、意見を発表したりしている姿がよく見られた。

<具体的な事例>

規則の尊重をねらいとした「星野君の二塁打」で、いくつかの価値が対立する場面で自己の取り得る行動を考え、発表していた。

①突出したよさを認める評価 視点1「多面的・多角的な見方・考え方」 所見文例

ねらいとする道徳的価値についての理解を深める場面において、積極的に話合いに参加し、意見を言うことができました。規則の尊重をねらいとした「星野君の二塁打」という学習では、自分ならどのような行動をするかという意見を発言することにより、クラスでの話合いが広がり、ねらいとする価値への理解が深まってきました。

B児 進歩の状況を認める評価（視点1「多面的・多角的な見方・考え方」）

道:3	C: 規則の尊重: シンガポールの思い出: WS: 友の意見になるほど思った
道:4	B: 相互理解: ブランコ乗りとピエロ: WS: 憎しみの感情が消えたピエロを自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしている。
道:4	D: 生命の尊さ: おばあちゃんからもらった命: WS: 班話し合い: 友達の感謝という意見に気付いた
道:5	A: 正直・誠実: 千羽づる: WS: 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直そうとしている

<一定の期間における顕著な様子>

友達の意見に積極的に聞こうとする姿勢がうかがえる。多面的にとらえられるようになってきた。

<具体的な事例>

「千羽づる」で、うそをついた主人公の後ろめたい気持ちを他者と議論する中で、誠実への理解を深めていた。

②進歩の状況を認める評価 視点1「多面的・多角的な見方・考え方」 所見文例

友達との話合いを通して、学習のねらいについて多面的に考えられるようになってきました。誠実について考える学習では、友達の意見をよく聞き、自分の考えに取り入れながら、誠実についての考えを深めることができました。

図5 一定の期間を経た見取りの方法と所見文例

先の1時間の授業で見取ってきたものを基に、一定の期間を経た評価に取り組んだ。表1は、積み重ねてきた授業の内容と「本時の評価の視点」を示したものである。ここでは、図5と関わるものを中心に上げている。図5は、突出したよさを認める評価と進歩の状況を認める評価の実践事例である。示し方について、「A児 突出したよさを認める評価」を例にとって説明する。左側は、1単位時間の授業の見取りを蓄積してきたデータの図である。その右側上の角丸四角形には、「一定の期間における顕著な様子」を示している。これは、一定の期間の中で児童のよさや進歩の状況が顕著に見られたことについて示している。その下の四角形には、そのことが分かる「具体的な事例」を示している。これら2つのことを踏まえて、一定の期間を経て見取った所見の文例を一番下に示している。このようにして道徳科の評価に取り組むことで、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価となるのではないかと考えた。

(3) 道徳科の評価についてまとめる

先に示した「(1) 道徳科の評価を探る」の内容は概略であり、「(2) 道徳科の評価の考え方に基き実践する」に示した実践事例も1例を掲載しただけである。研究の内容の全てをまとめたものとして、冊子「道徳の評価」にまとめ、詳細を示している。さらに、冊子については、小・中学校合同道徳主任会において、小学校、中学校全校に配布した。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果について

道徳科の評価を行うには、見取る視点が必要になると考え「道徳科の評価の視点」を設定した。この視点を設定したことで、発言や記述などの記録をどのように見取り、道徳科の評価をどのように表せばよいかが見えてきた。さらに、確かな見取りができると、児童生徒に即した具体的な指導を意識した授業を行おうとすることにつながるので、道徳科の授業の改善充実を図ることになるのではないかと考える。また、このようなことを踏まえて実践をしていく中で、1時間1時間の授業の積み重ねの大切さや、一定の期間の中での児童生徒のよさが見えてくることがわかった。

2 課題について

今回の研究では、実践を行う期間を長くとることができなかった。学期や年間で実践した場合、選択する「道徳科の評価の視点」が偏ることが考えられる。また、「本時の評価の視点」を設定する場合「児童生徒の発達の段階」「教材の特性」「発問」「指導方法」等を踏まえることが考えられる。しかし、これらのことについては取り組むことができなかったため、今後、明らかにしていきたい。

評価にあたっては、発言や記述の記録をもとに見取っていくことが多くなるが、これ以外の方法についても具体的な取組を考えていきたい。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお助言をくださった先生方、研究をご支援してくださった研究員所属校の校長先生ならびに教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- 永田繁雄 編集 『道徳科』評価の考え方・進め方 教育開発研究所 2017年
- 赤堀博行 監修著「子どもを幸せにする『道徳科』」小学館 2017年
- 高木展郎・三浦修一・白井達夫 著「新学習指導要領がめざすこれからの学校・これからの授業」小学館 2017年
- 押谷由夫 編著「アクティブラーニングを位置付けた小学校特別の教科道徳の授業プラン」明治図書 2017年
- 柴原弘志 編著「アクティブラーニングを位置付けた中学校特別の教科道徳の授業プラン」明治図書 2017年